MINGEI: The Beauty of Everyday Things

2024 2/10 sat. – 3/24 sun.

MINGEI
美は暮らしのなかにある
民藝
プレスリリース

東広島市立美術館
HIGASHIHIROSHIMA CITY MUSEUM OF ART

［上から］緑黒釉掛分皿 因幡牛ノ戸(鳥取) 1931年頃／流描皿 河井寛次郎 京都 1927-28年頃／
藍鉄絵紅茶器 濱田庄司 栃木 1935年頃　いずれも日本民藝館蔵　Photo: Yuki Ogawa

民藝 MINGEI 美は暮らしのなかにある

展覧会概要

展覧会名	民藝 MINGEI—美は暮らしのなかにある MINGEI: The Beauty of Everyday Things
会期	2024年2月10日(土)– 3月24日(日)
会場	東広島市立美術館 〒739-0015 広島県東広島市西条栄町9-1
開場時間	9:00–17:00(入館は閉館30分前まで) 2月10日(土)は10:00開館／2月24日(土)、3月23日(土)は19:00まで開館
休館日	月曜日(ただし2月12日(月)は開館、2月13日(火)休館)
料金	一般1,200円、大学生800円、高校生以下無料
主催	東広島市立美術館、中国新聞社、朝日新聞社、東映
後援	NHK広島放送局、中国放送、広島テレビ、広島ホームテレビ、テレビ新広島、広島エフエム放送、(株)広島リビング新聞社、プレスネット、KAMONケーブル、FM東広島89.7MHz、尾道エフエム放送
特別協力	日本民藝館
協力	静岡市立芹沢銈介美術館、カトーレック
監修	森谷美保(美術史家)
監修協力	濱田琢司(関西学院大学文学部 教授)

巡回情報

本展覧会は東広島市立美術館に続いて、東京、富山、愛知、福岡に巡回予定です。

企画趣旨

約100年前に思想家・柳宗悦(やなぎむねよし)が説いた民衆的工藝、「民藝」。日々の生活のなかにある美を慈しみ、素材や作り手に思いを寄せる、この「民藝」のコンセプトはいま改めて必要とされ、私たちの暮らしに身近なものとなりつつあります。本展では、民藝について「衣・食・住」をテーマにひも解き、暮らしで用いられてきた美しい民藝の品々約150件を展示します。また、いまに続く民藝の産地を訪ね、そこで働く作り手と、受け継がれている手仕事も紹介します。

さらには、2022年夏までセレクトショップBEAMSのディレクターとして長く活躍し、現在の民藝ブームに大きな役割を果たしてきたテリー・エリス／北村恵子(MOGI Folk Art ディレクター)による、現代のライフスタイルと民藝を融合したインスタレーションも見どころのひとつとなるでしょう。

柳が説いた生活のなかの美、民藝とは何か——そのひろがりと今、そしてこれからを展望する展覧会です。

Photo: Yuki Ogawa

結び文座布団 芹沢銈介 静岡
1930年頃 個人蔵

みどころ

1 細やかな手仕事が施された刺し子の着物や、素朴な味わいにあふれる器など民藝の名品、約150件が集結

国内のみならず世界各地に目を向け、名も無き作り手たちが生み出す日用品にこそ「美」が宿る、と見出した柳宗悦の眼。本展では、柳らが集めた暮らしのなかにある美しい民藝の品々を中心に紹介し、「民藝ってなんだろう？」という初心者の方々にも親しみやすくご覧いただきます。文様の美しさだけでなく機能性も兼ね備えた江戸時代の刺し子の着物や、大胆な模様が印象的なアイヌの衣装、愛らしいイギリスのスリップウェアの皿、フォルムの美しい芯切挟や手箒といった、日本民藝館（東京・目黒）や静岡市立芹沢銈介美術館などの所蔵する、時代や地域も様々な名品が並びます。

2 民藝の「いま、そしてこれから」に迫る展覧会

柳の亡きあとも、民藝運動はひろがりを見せました。また、日本の各地でも伝統を受け継ぎ、現在でも新たな職人や手仕事の品が誕生しています。本展では、現在の民藝の作り手に注目し、小鹿田焼（大分）、丹波布（兵庫）、鳥越竹細工（岩手）、八尾和紙（富山）、倉敷ガラス（岡山）の5つの産地を紹介。現代作の展示ともに、現地を取材して制作した本展オリジナルの映像により、そこで働く人々の想いや制作風景を伝えます。
また、現在の民藝ブームの先駆者ともいえるテリー・エリス／北村恵子（MOGI Folk Artディレクター）によるインテリアの実例を、現代の生活に溶け込む「これからの民藝スタイル」としてインスタレーション展示します。
つくる人、つなぐ人、つかう人のコミュニケーションで続いていく、これからの民藝にも視点をひろげます。

3 展覧会特設ショップもお楽しみに

本展覧会の特設ショップでは、第Ⅲ章で紹介する東京・高円寺のショップMOGI Folk Artが日本各地の作り手たちと交流して生み出した別注品の数々や、注目の染色家／アーティスト・宮入圭太氏が本展のためにデザインしたグッズ、そして各地のやきものやガラス、布、和紙、木工など、国内外の職人による民藝の品々を多数取り揃えます。
暮らしのなかに取り入れたい、民藝ならではの自然の素材や、人の手のぬくもりに、特設ショップでも出会うことができます。どうぞご期待ください。

［左から］
角酒瓶　小谷眞三　倉敷（岡山）　1979年／
酒瓶　小谷眞三　倉敷（岡山）　1985年頃／
栓付瓶　メキシコ　20世紀中頃
いずれも日本民藝館蔵

Photo: Yuki Ogawa

柳宗悦と民藝運動

「民藝運動の父」と呼ばれる思想家・柳宗悦（1889-1961）。東京、麻布生まれ。1910年、雑誌『白樺』の創刊に参加。宗教哲学や西洋美術などに深い関心を持ち、1913年に東京帝国大学哲学科を卒業。その後、朝鮮陶磁、木喰仏の調査研究、収集を進めるなか、無名の職人が作る民衆の日用雑器の美に関心を抱いた。1925年には、その価値を人々に紹介しようと「民藝」という新語を作り、濱田庄司や河井寬次郎ら共鳴する仲間たちと民藝運動を創始する。1936年、日本民藝館を開設し、初代館長に就任。以後ここを拠点に、国内外各地への調査収集の旅、文筆活動や展覧会活動と、活発な運動を展開した。

MINGEI
美は暮らしのなかにある
民藝

第Ⅰ章
1941 生活展
——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章
暮らしのなかの民藝
——美しいデザイン

第Ⅲ章
ひろがる民藝
——これまでとこれから

日本民藝館「生活展」会場写真 1941年

MINGEI

第Ⅰ章
1941生活展——柳宗悦によるライフスタイル提案

1941（昭和16）年、柳宗悦は自身が設立した日本民藝館（東京・目黒）で「生活展」を展開。民藝の品々で室内を装飾し、いまでいうテーブルコーディネートを展示しました。暮らしのなかで民藝を活かす手法を提示した、モデルルームのような展示は当時珍しく、画期的でした。

第Ⅰ章では「生活展」の再現を試み、実際に出品された作品を中心に、柳が説いた暮らしの美を紹介します。

藍鉄絵紅茶器
濱田庄司 栃木 1935年頃 日本民藝館蔵

笹の葉の文様が描かれた濱田庄司の紅茶器セットは、柳宗悦が自宅で愛用したもの。ティーポットは日本の土瓶の形状を採用しており、日本家屋の室内で用いるのに相応しい姿を見せる。

チャイルズ・スクロールバック・アームチェア
イギリス 19世紀 日本民藝館蔵

1929年に柳宗悦と濱田庄司がイギリスから持ち帰ったウィンザーチェアのひとつ。テーブルと椅子を使う暮らしの伝統がない日本において、柳が優れた椅子として使用したのは、イギリスの椅子が中心であった。

第Ⅰ章
1941 生活展
——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章
暮らしのなかの民藝
——美しいデザイン

第Ⅲ章
ひろがる民藝
——これまでとこれから

第Ⅱ章
暮らしのなかの民藝——美しいデザイン

柳宗悦は、陶磁、染織、木工などあらゆる工芸品のほか、絵画や家具調度など多岐にわたる品々を、日本のみならず朝鮮半島の各所、中国や欧米などへ旅し、収集を重ねました。時代も古くは縄文時代から、柳らが民藝運動を活発化させた昭和にいたるまでと幅広く、とりわけ同時代の、国内各地で作られた手仕事の日常品に着目し、それらを積極的に紹介しました。

第Ⅱ章では民藝の品々を「衣・食・住」に分類し、それぞれに民藝美を見出した柳の視点をひも解きます。

裂織丹前（部分）越前 江戸～明治時代 19世紀 日本民藝館蔵

Photo: Yuki Ogawa

Ⅱ——❶「衣」を装う

“只被る為なら美しさ等どうでもいい。だが美しさは着たい気持をそそる。”

—柳宗悦『用と美』1941年

駒散し文様羽織
江戸時代 19世紀
日本民藝館蔵

江戸時代に下総国（千葉）に設けられた御用牧場で、牧士（馬の世話をする職）が身に付けた羽織。馬の世話役を将棋の駒で装う、洒落の効いた大胆なデザイン。

（上から）

流描指輪（2点）
河井寛次郎（細工：増田三男）
京都 1930-40年代

赤漆彫卍文帯留（右）
黒田辰秋 京都 1930年頃

銀象嵌赤漆花字帯留（左）
青田七良 京都 1930年頃

色絵五弁花模様帯留
富本憲吉（細工：増田三男）
東京 1931年

染付更紗模様帯留
富本憲吉（細工：増田三男）
東京 1931年

個人蔵

Photo: Yuki Ogawa

最初期の民藝運動に大きな影響を与えた高林兵衛の旧蔵品で、夫人や娘たちが愛用したものだという。

MINGEI
美は暮らしのなかにある
民藝

第Ⅰ章
1941 生活展
——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章
暮らしのなかの民藝
——美しいデザイン

第Ⅲ章
ひろがる民藝
——これまでとこれから

木綿切伏衣

アイヌ（北海道） 19世紀
静岡市立芹沢銈介美術館蔵

大胆な模様をあしらったアイヌの衣服。模様に不思議な生動感があり、紺、橙、白の配色も鮮やかで、芹沢銈介が収集したアイヌの衣装の中でも、特に印象的である。

1920-30年代

黄八丈着物

伊豆諸島 八丈島 東京 1920-30年代
日本民藝館蔵

東京・八丈島で生産される絹織物、黄八丈。島内の草木を用いて黄色、樺色、黒色の3色に絹糸を染め、染と乾燥を何度も繰り返すことで色彩を定着させ、縞や格子などの文様を手織りで作った。

MINGEI

Photo: Yuki Ogawa

食

Ⅱ——❷「食」を彩る

“人間は美味を好む。だが料理だけに止めるのではない。
それを綺麗に皿に盛る。その皿さへも選擇する。”

—柳宗悦『用と美』1941年

スリップウェア角皿

イギリス 18世紀後半-19世紀後半
日本民藝館蔵

現代でも人気が高いイギリスのスリップウェアも、民藝同人らが日本に広めたやきもののひとつ。本作は柳旧蔵のスリップウェアの優品で、数多く作られたパイ皿。

網袋（鶏卵入れ）

朝鮮半島 20世紀初頭
日本民藝館蔵

藁編みの籠の中心に開いた窓から卵を入れるという、朝鮮の鶏卵入れ。上部の紐で吊るして、保管できるように作られている。

塗分盆

江戸時代 18世紀
日本民藝館蔵

MINGEI
美は暮らしのなかにある
民藝

第Ⅰ章
1941 生活展
——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章
暮らしのなかの民藝
——美しいデザイン

第Ⅲ章
ひろがる民藝
——これまでとこれから

Photo: Yuki Ogawa

桐文行燈 江戸時代後期 個人蔵

Ⅱ——❸「住」を飾る

MINGEI

“暮しは色々なものを招く。それに応じて適宜な材料が選ばれ、適当な形が整えられる。”
—柳宗悦「用と美」1941年

（左上から時計回りに）
手箒
仙台郡山（宮城） 1939年頃
鹿沼箒
下野鹿沼（栃木） 1939年頃
手箒
信州（長野） 1939年頃
いずれも日本民藝館蔵

芯切鋏
京都 1920年代後半-1930年代前半
日本民藝館蔵

昭和戦前期の京都で作られていた、和蝋燭の芯を切るための仏具用鋏。切り取った芯が落ちないような造りや、握りやすさを考慮した柄など、機能性もよく考えられている。

色絵猪文タイル
オランダ 16-17世紀 日本民藝館蔵

円座
朝鮮半島 1930年代
日本民藝館蔵

柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司の3人は、1936年、1937年と2年連続で朝鮮を旅し、当時朝鮮で作られていた日用品を購入した。これは模様として文字が編み込まれた座布団代わりの敷物・円座。

椅子
オーストリア 19世紀初頭
静岡市立芹沢銈介美術館蔵

第Ⅰ章
1941 生活展
——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章
暮らしのなかの民藝
——美しいデザイン

第Ⅲ章
ひろがる民藝
——これまでとこれから

MINGEI

T O P I C

気候風土が育んだ暮らし——沖縄

本土から遠く離れた沖縄は、古い歴史を持ち、独自の文化、風習を育んできました。第Ⅱ章最後では、柳が「奇跡」と称えた沖縄の民藝に焦点をあて、紅型、織物、陶器、漆器などにより、かつての沖縄の豊かな暮らしを顧みます。

芭蕉布絣着物
沖縄 19-20世紀前半
静岡市立芹沢銈介美術館蔵

クバ団扇
沖縄 1950-60年代 日本民藝館蔵

雪輪に桜楓文紅型着物
沖縄 19-20世紀前半
静岡市立芹沢銈介美術館蔵

紅型は、南国らしい色鮮やかな沖縄の模様染である。模様の多くは、日本本土からの影響が強いが、季節感がなく、四季の模様が自由に取り込まれているところに特徴がある。芹沢銈介は、沖縄の紅型に出会って夢中になり、染色家としての道を歩み始めた。

第Ⅰ章
1941 生活展
——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章
暮らしのなかの民藝
——美しいデザイン

第Ⅲ章
ひろがる民藝
——これまでとこれから

入れ子土鍋　グアダラハラ市近郊（メキシコ）
20世紀後半　静岡市立芹沢銈介美術館蔵

第Ⅲ章
ひろがる民藝——これまでとこれから

柳宗悦の没後も民藝運動は広がりを見せました。濱田庄司、芹沢銈介、外村吉之介が1972（昭和47）年に刊行した書籍『世界の民芸』では、欧州各国、南米、アフリカなど世界各国の品々を紹介。各地の気候風土、生活に育まれたプリミティブなデザインは民藝の新たな扉を開きました。

一方、民藝運動により注目を集めた日本各地の工芸の産地でも、伝統を受け継いだ新たな製品、新しい世代の職人たちが誕生しています。本展では国内5つの産地から、これまでと現在作られている民藝の品々や、そこで働く人々の“いま”を紹介します。

そして、本章最後では、現在の民藝ブームの先駆者ともいえるテリー・エリス／北村恵子（MOGI Folk Art ディレクター）の愛蔵品や、世界各地で見つけたフォークアートが“いま”の暮らしに融合した「これからの民藝スタイル」を、インスタレーション展示で提案します。

Ⅲ——❶『世界の民芸』——新たな民藝の世界

［左から］濱田庄司、芹沢銈介、外村吉之介『世界の民芸』朝日新聞社　1972年　個人蔵／靴下　アゼルバイジャン地方（イラン）20世紀後半　静岡市立芹沢銈介美術館蔵／人形　フニン県ワンカヨ（ペルー）20世紀後半　静岡市立芹沢銈介美術館蔵

Photo: Yuki Ogawa

第Ⅰ章
1941 生活展
——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章
暮らしのなかの民藝
——美しいデザイン

第Ⅲ章
ひろがる「民藝」
——これまでとこれから

Ⅲ—— ❷民藝の産地 —作り手といま

昭和戦後期以降の日本のものづくりは機械での生産が主流となりますが、伝統を失わずに手仕事を続ける産地、失われた手わざの復活を試みる職人、新たな民藝を創作する人々が登場します。本展では 5 つの産地に焦点を当て、かつての品物と現代の製品、そこで働く人々のいまを紹介します。

小鹿田焼

おんたやき
大分県

江戸時代中期から続くやきものの里。川の水流の力で地元の土を搗き、地形を活かした登り窯で焼く。一子相伝の窯に伝わる、日常使いの器たち。

Photo: Yuki Ogawa

丹波布

たんばぬの
兵庫県

手紡ぎの糸を草木で染め、絹のつまみ糸を織り込む手織の布。江戸末期にはじまり一度は廃れるも戦後復興し、現代の作り手へと引き継がれる。

Photo: Yuki Ogawa

鳥越竹細工

とりごえたけざいく
岩手県

数多い産地のなかでも柳が好んだ、寒冷の地の細くしなやかな原料でつくる繊細な竹細工。一方で、現在は素材調達の危機という局面をむかえている。

Photo: Yuki Ogawa

八尾和紙

やつおわし
富山県

もとは薬売りの包み紙として発展した八尾和紙。現在、八尾で唯一和紙作りを続ける桂樹舎は、芹沢銈介の影響による色鮮やかな型染和紙に今も新しい試みを重ねる。

Photo: Yuki Ogawa

倉敷ガラス

くらしきがらす
岡山県

ガラス職人の小谷眞三が、民藝運動の関係者らの勧めではじめた日常使いのぬくもり溢れるガラス器。現在は二代目の工房に引き継がれる。

Photo: Yuki Ogawa

第Ⅰ章
1941 生活展
——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章
暮らしのなかの民藝
——美しいデザイン

第Ⅲ章
ひろがる民藝
——これまでとこれから

MINGEI

T O P I C

Mixed MINGEI Style by MOGI

第Ⅲ章最後では、現在の民藝ブームを牽引する存在として活躍するテリー・エリス／北村恵子（MOGI Folk Art ディレクター）による、現代のライフスタイルと民藝を融合したインスタレーションを展開します。

テリー・エリス／北村恵子
（MOGI Folk Art ディレクター）自邸

Photo: Yuki Ogawa

MOGI Folk Art
モギ フォーク アート

東京・高円寺でMOGI Folk Artを主宰するテリー・エリスと北村恵子は、セレクトショップBEAMSのバイヤーとして活躍していた1990年代から、民藝運動とも関わりの深い日本の手工芸品を、服飾や北欧インテリアと組み合わせて紹介してきました。2003年にBEAMS内のレーベル「fennica」を立ち上げ、2022年には自身のショップMOGI Folk Artを新たにオープン。現在に至るまで「デザインとクラフトの橋渡し」をテーマに、国内の産地を回って見出したトラディショナルな民藝・工芸の品々を現代の暮らしに取り入れることでもたらされる豊かさを提案しています。作り手との交流を通じて、伝統的な技法やモチーフを活かしたオリジナルの別注品も数多く生み出しています。

MOGI Folk Art ディレクターのテリー・エリスと北村恵子

Photo: Yuki Ogawa

関連イベント

❶オープニングトーク
「日々の暮らしを豊かにするコツ―民藝と手仕事の魅力」

日時　2月10日（土）　14:00～15:30
ゲスト　テリー・エリス／北村恵子（MOGI Folk Art ディレクター）
会場　1Fアートスペース
定員　40名（要申込・参加無料）
締切　1月27日（土）必着

❷ワークショップ
「おいしい珈琲を淹れて、民藝の器で味わう」

日時　2月17日（土）［1回目］10:00－12:00／［2回目］14:00－16:00
講師　川上厳雅（OBSCURA COFFEE ROASTERS）
会場　1Fアートスペース
定員　各回6名（要申込）
参加費　1,500円　対象：広く一般
締切　2月3日（土）必着

❸クロストーク
「民藝の作り手と配り手―つなぐものたち」

日時　2月24日（土）　14:00～15:30
講師　小谷栄次（倉敷ガラス 職人）、
山本尚意（融民藝店 店主）
会場　1Fアートスペース
定員　40名（要申込・参加無料）
締切　2月10日（土）必着

❹ 記念講演会
「暮らしのなかの民藝」

日時　3月2日（土）　14:00～15:30
講師　森谷美保（本展監修／美術史家）
会場　1Fアートスペース
定員　40名（要申込・参加無料）
締切　2月17日（土）必着

❺ワークショップ
「天然藍をつかった染めもの体験」

日時　3月16日（土）　14:00～16:00
講師　前垣佳代（染色家）
会場　1Fアートスペース、藍泉館（賀茂泉酒造敷地内）
定員　10名（要申込）
参加費　1,000円
対象　5歳以上（小学生以下は保護者同伴）
締切　3月2日（土）必着

関連イベント申込方法

往復ハガキまたはwebフォームで
お申し込みください

往復ハガキの場合

［往信裏面］
（1）イベント名（❷は希望時間を併記）
（2）参加者及び❺は同伴者氏名
（同伴者は1名のみとし「同伴者」と明記すること）ふりがな・年齢
（3）代表者電話番号、住所

［返信表面］
（1）〒返信先住所、代表者氏名
申込先：東広島市立美術館
（〒739-0015 東広島市西条栄町9-1）

Webフォームの場合

※応募多数の場合は厳正なる抽選により当選者を決定します。／応募は1組1通まで、複数申込は1件として取り扱います。／記入内容に不備不足がある場合は無効といたしますのでご了承ください。記入例は当館HPよりご確認ください。

民藝 MINGEI 美は暮らしのなかにある

チケット

観覧料

前売券 一般 1,000円　大学生 640円

［販売期間］12月10日（日）―2月9日（金）まで
［販売場所］東広島市立美術館、セブン-イレブン（セブンコード：103-744）

当日券 一般 1,200（1,000）円*　大学生 800（640）円*　高校生以下無料*

＊ 学生証をご提示ください／（ ）内は当日券に限り20名以上の団体料金／
後期高齢者医療被保険証・身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳の交付を
受けられている方は受付にて各手帳（障害者手帳アプリ「ミライロID」利用可）ご提示で 観覧料無料

宮入圭太
（みやいり・けいた）

Photo: Yuki Ogawa

染色家／アーティスト。柳宗悦の思想に惹かれ、民藝を学び、民藝と向き合いながら作品を制作している。ユニクロのフリーマガジン『LifeWear magazine』2022年秋冬号の特集、表紙に採用され、2023年1月には伊勢丹新宿店で作品展を開く等、注目を集める。本展のために描きおろした型染作品を、本展オリジナルグッズとして展開、販売予定。

企画チケット　※セブンチケットでのみ販売

オリジナルグッズセットチケット
宮入圭太 本展オリジナルアート サコッシュ

今、注目の染色家／アーティスト・宮入圭太さんの描きおろし作品があしらわれたサコッシュ（斜め掛けの小型バッグ）と、本展観覧券1枚がセットになったお得なチケットです。

販売価格：2,700円（税込）　**数量限定**

［販売期間］12月10日（日）－3月24日（日）　※なくなり次第終了
［販売場所］セブン-イレブン（セブンコード：103-744）のみで販売
web申込時には1枚につき110円（消費税込）の手数料が必要です。

サイズ（約）：本体／横170×縦225mm
持ち手／幅10×長さ1150mm　素材・色／キャンバス、生成

●チケット購入時に発券されるグッズ引換券を当館1階受付でご提示ください。
サコッシュとお引換えいたします（会期中のみ有効）。
●セットとなるサコッシュは本チケット限定デザインのため会場販売はありません。
同サイズで別デザインのサコッシュを1,800円（税込）で会場販売予定です。

展覧会公式サイト

https://mingei-kurashi.exhibit.jp/

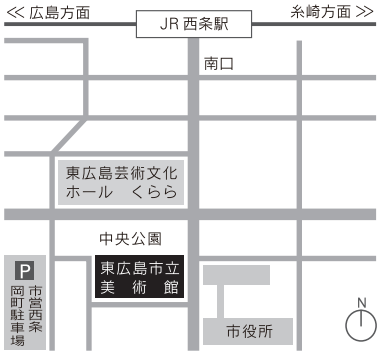
展覧会公式SNS

@mingeiten　@mingeiten

アクセス

［電　車］ JR山陽本線「西条駅」南口から約400m(徒歩約10分)
［新幹線］ JR山陽新幹線「東広島駅」から
「西条駅」行バス「中央公園前」下車すぐ（バス約20分）
［自動車］ 山陽自動車道「西条インターチェンジ」から約7分

※車でご来館の際は近隣の駐車場をご利用ください。
市営「西条岡町駐車場」をご利用の方は駐車場料金が
2時間無料になります。



お問合せ

東広島市立美術館
HIGASHIHIROSHIMA CITY MUSEUM OF ART

〒739-0015 広島県東広島市西条栄町 9-1
TEL.082-430-7117

https://hhmoa.jp/

左上から時計回りに：
［左から］角酒瓶 小谷眞三 倉敷（岡山） 1979 年／酒瓶 小谷眞三 倉敷（岡山） 1985 年頃／栓付瓶 メキシコ 20 世紀中頃 いずれも日本民藝館蔵、八尾和紙（富山）、［上から］竹行李 陸中鳥越（岩手） 1930 年代／刺子足袋 羽前庄内（山形） 1940 年頃 いずれも日本民藝館蔵、鳥越竹細工（岩手）
Photo: Yuki Ogawa